

詩佛の再北遊と加越能文人たち(その二)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 畑中, 榮 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/46392

詩佛の再北遊と加越能文人たち（その二）

畑中 榮

（承前）

九月六日は快晴だった。秋声館を発って一行が金沢に帰り着いたのは夕刻時分である。北陸の晩秋には珍しい快晴に誘われて、諸方に立ち寄り詩を吟じながらの帰途だったろう。金沢ではこの日から、藩侯齊泰の襲封入部を祝つての盆正月である。これは加賀藩独特の祝祭日で、藩主の誕生・襲封や家督相続等の晴れの日に、一、二、三日を限度に全町挙げて休日として祝つたことをいう。いわば盆と正月のお祝いごとを同時に行う特別な祝祭日で、齊泰の代だけで十回、父の齊広の代には十五回も実施されている。

街のあらゆる場所に旗や幟が立ち、軒先には提灯や行燈が灯されて、昼とは全く異なる明るさが街全体を埋め尽くしている。軒先は開け広げられ、そこに宝船や出世鯛・鶴亀といった目出度尽くしの巨大な造り物が並び立ち、いづれにも灯りが灯されて眼を奪う目映さである。そしてこの巨大な造り物の間には、幔幕や作り花、縁起物の絵巻等意匠を凝らした裝飾が埋め尽くされていた。

辻々の曳山の舞台で演奏される囃子や鳴り物、また別の辻では軽

業等の演舞が披露されている。そして所々の軒先ではお茶やお菓子、家によつては飲食までも振る舞われる。記録によれば、旭に鶴・天の岩戸・天の浮橋・殿島社・梅や桃や櫻の造花・梅鉢・浦島・えびす・海老・近江八景・尾上松・春日社・金沢八景・唐崎・御所車・住吉・松竹梅・西王母・出世鯛・末広・太公望・だるま・花車・竜宮城・富士・七福神・日の出鶴・福助等百種類以上の造り物が腕を競つて披露された^{注1}。こうして目や耳を楽しませ舌を楽ませさせてくれるカーニバルは、延々と北陸街道を埋め尽くしていた。

その破天荒ともいえる街中の熱狂の中を詩佛は還つた。詩佛は記す。「九月六日金城に入る。此の日家々は燈を掛け、士女は雜れて還る。歓聲は四に動く。俗に之を盆正月という。盆は中元なり、正月は上元なり。蓋し今公襲封入部の初めにして、錢帛をもつて国中の民に賑む。民之を祝ふこと、上元中元に比ぶ」と。そして賦す、「兒女は聯翩として袖を連ねて回る。家家には客を迎へて宴を新たに開く。街を満たす燈火は晝よりも明るく。元夕中元一併に来る」と^{注2}。北陸街道はこの賑わいのメインストリートである、片町・香林坊・

南町・橋場町・尾張町を貫いて空翠の屋敷まで続いている。さながら歓迎の渦に揉まれる貴賓客のような帰還だった。

四、再び金沢での日々

さて山中から帰ってくれば、それまでと変わることはない、ひきもきらぬ招請の日々が待っていた。二十日頃から雨や曇りを繰り返してきた空も、少しずつ冬らしさを増し、二十四日には医王山に初冠雪を見た。それは冬の訪れがほんの間近である兆しで、二十六日には平地にも初めて霰を見た。空翠楼で小集があつたのはそんな寒い日である。「豈に唯だ青女の心機を費すのみならんや。寒雨は時に和み、急に霰飛ぶ。空翠楼頭、紅葉の節。今朝は已に覚ゆ 昨朝とは非なることを」と詩佛が詠う(73)。「青女」は霜や雪を主る女神で九月の異名である。九月も下旬になって、青女が去るに当たって心を痛めているからであろうか、昨夜からの寒雨に今日は霰が混じるようになった。空翠楼ではまだ紅葉の美しい節なのだが、今朝の寒さはもう昨日の比ではないのだ、と。北陸の冬の天候は変わりやすい。さつき青空が覗いていたかと思うと、またたく間に雲が空を覆って、風混じりに霰が降ってくる。それは昨日の穏やかな陽気とはうってかわるものであった。

この後も晩秋の雨は止まなかつた。甲州大夫長連愛の秋錦閣の詩宴に招かれたのもそんな雨の中である。連愛は長氏第七世連起の二男で、宝暦十一年の生まれ。寛政十二年に家督三万三千石を襲いで

従五位下甲斐守に叙任し、時に六十三歳であつた。秋錦閣は「三間の高閣に紅楓を鎖す」楼閣だったという。その邸は金沢城の近く、南町を中心として玉川公園に至る広大な地域を占めていたが、この楼はその地にあつたのだらうか、それとも別に亭を持っていたのだらうか。高殿は広大な庭園をいろんな角度から眺めることを許し、欄干によりかかっていると、どれだけ眺めても飽きなかつた。詩佛はいう。「欄干に倚遍して去意無し。水精の簾は隔つ、錦屏風」と(75)。楓の紅葉が庭一面を彩るのは錦模様屏風で、そこに降りかかる晩秋の水雨はさながら水晶の簾である、と。

佐々木旭堂が詩佛に寄韻したのもこの頃である。旭堂は二千五百石を拜領して人持組にあり、長甲斐守組にあつた藩士である。京の大師流の書を継ぐ家系に育ち、曾祖父定明は室鳩巢門下に詩を学び、『燕台風雅』にも幾首かの作を遺す人である。旭堂も詩を手がけたと思えるが、菊潭に寄韻したことを示す記事がある外(注3)、詩は本書に一首を遺すのみである。詩佛に直接寄韻する理由も見当たらないから、甲斐守組にあつたという縁で、秋錦閣での小集に参加を許されていたのかもしれない。「半句も吟する時、尤も鬼を泣かしめ。一毫を揮ふ處には更に神を驚かす。請ふ看よ、渺々たる穹壤の裏。形影とも些も子が身に似たるなし」と(附54)。「毛詩」大序の「動天地、感鬼神、莫近於詩」(天地鬼神をも感動させるものは詩にまさるものはない)を下に敷くもので、詩佛の作は一言半句といえども鬼神を感動させ、神々をも驚嘆させずにはおかないという。加えてこの渺々と広い天地の間で、姿形といえど何一つ詩佛に似るものがないほどだ、と賞賛する。詩人としての作のみならず、その人間性

に至っても、この世に並ぶ者は誰一人いないと、敬意を表したのである。(注4)

1. 九月中の詩宴

以上比較的時日の明らかなものについて見たが、日時は明確ではないが九月中の小集と思えるものを次に順次掲げる。

a. 横山致堂宅聯句

致堂宅で聯句の会が持たれたのは九月中旬かと推察される。致堂・孫坡・空翠・詩佛の四人で八聯を分けた。なお(孝)は致堂、(行)は詩佛、(瑜)は孫坡である。(65)

致堂大夫園亭聯句

今年此會豈前期(孝)

重到園亭把酒后 恰值寒暄相適節(行)

殊憐風日最佳時 檐前烟散山如洗(瑜)

竹外雲晴月似篩 贈斫鱸魚盤積雪(空翠)

席編湘笋坐敷漪 新詩分韻爭先後(孝)

舊話改端兼喜悲 廊朝江湖元是一(行)

狐裘布褐孰分岐 文筵不必要煩禮(瑜)

聯句偏差乏藻思 何處鐘聲報更漏(空翠)

銀河西落玉繩垂(孝)

今年の此の會 豈に前に期せんや。

重ねて園亭に到りて酒后を把る。恰も寒暄相ひ適ふ節に値ひ。殊に風日の最も佳き時なるを隣れぶ。檐前には烟散じて山は

洗ふ如く。

竹外に雲晴れて月は篩に似たり。檐には鱸魚を斫りて盤に雪

と積み。

席には湘笋を編みて坐に漪を敷く。新詩は韻を分かちて先後

を争ひ。

舊話は端を改めて喜悲を兼ね。廊廟と江湖とは元と是れ一に

して。

狐裘と布褐とは孰か岐を分かつた。文筵には必ずしも煩禮を

要せず。

聯句は偏へに藻思の乏しきを羞ず。何處の鐘聲ぞ更漏を報ぜ

しは。

銀河西に落ちて玉繩垂る。

「寒暄相適節」の「寒暄」は冬の寒さと夏の暑さで、寒暖が丁度い

い時節であること。「風日」は天候・風景、「檐前」は建物の軒や庇。「鱸

魚」は淡水に棲むはぜに似た魚で、この刺身は美味といわれた。「湘

笋」は湘水のほとりに産するまだら模様の竹で、「漪」はさざ波。こ

こでは班竹を編んだ敷物がさざ波を打っているように見える様。「廊

廟」は政治を執行する表座敷で、「江湖」は広く世の中を意味するが、

ここでは隠居地。「狐裘」は狐の腋下の白毛で造った毛皮で、諸侯の

朝服としたもの。また「布褐」は布に毛を織り込んだ賤者の着る服。

「文筵」は詩文を楽しむ酒席、「更漏」は夜更けを告げる時の鐘、「玉

繩」は北斗の五星玉衡の北にある天乙・太乙の二星をいう。

節はあたたかも寒くも暑くもなく、雨が上があれば遠くらの山々は洗ったように清澄で、月光は竹林を漏れて、まるで篩にかけられたよう

に降ってくる。盤上の刺身は雪のように新鮮で、坐下の竹筵は班竹を編んだもので、月光の下では小波が打つようである。この聯句の席では、わずらわしい礼儀作法もなければ、役職とか身分とかの区別もない。新詩を練り昔話に花を咲かせている内に、いつの間にか夜が更け、天の河も西に落ちて、太乙星も山際に垂れかかっている。今日の風流の文筵の楽しさを分かち合ったのである。

この聯句の会がもたれたのは致堂の別邸である海棠園であらう。寺町の、犀川を眼下に望む十m余りの高みにあつて、その崖一面を海棠などの花木で埋め尽くした庭園である。環翠楼はその中にあり、現在は辻家庭園となつて一般公開されている。高みから望む犀川や金沢の街並み、急坂を巡り流れる環水に沿つて植えられた種々の庭木。広大な借景の中に、季節の彩りが贅沢に目を楽しませる園であつた。そしてこの海棠園はまた、二十一歳という若さで没した正妻蘭蝶との思い出の場所でもある。その没の文化十二年に刊行された『海棠園合集』や『致堂詩稿』の所々に、この楽しい日々が躍動しており、その中の作にいう（『致堂詩稿』一48）。

海棠の花の下に蓆を敷いて二人だけの詩宴を開いた時のことである。蘭蝶は、快い春風と花の香と暖かさで酔つて寝てしまった。やがて我に返り、近くの枝を数本折り取つて傍の侍女の髪に、「香りの良い簪よ」と挿してやると、幼い侍女は更に髪いっぱいに燕支えんじを挿し足し、二人手を取つていかにも楽しそうに海棠の花の中をはしやぎ回つたのだつた。そして二人に加えて蝶や蜂までもその香りに誘われて、頭上に舞つたのだつた、と。

その蘭蝶が去つて九年になるが、それでも園の木立のあちこちに

蘭蝶の悪戯っぽい笑顔が残る。紅葉の葉ずれの下や環水のせせらぎの誘うあたりに顔を覗かせ、そつと目と耳を聯句会にやつて、自らもその楽しみを楽しんでいる。そんな幻がふと見る者に訪れたりするもの、この海棠園なのだった。

b. 東軒・潺湲亭小集

東軒や潺湲亭で小集が持たれたのは聯句会の近くである。場所も主催者も未詳であるが、詩佛の東軒での作に「三間の流れに枕む屋は、幽邃にして塵喧を絶ゆ」とあり、「ここにおれば詩料が多すぎて手に余る」ともいう（66）。また潺湲亭についても、空翠はこの亭の主のことを、「元市隠、此の地幽栖を占む」といい、商齋の次の作にも、清流が潺湲と流れ、晩秋ともなれば蟋蟀の鳴き声が断続して聞こえる、寂寞とした場所であるという。共に浅野川近辺にあつたものであろうか（附84）。

與詩佛先生飲潺湲亭

龜田商齋

幽棲容我輩 来往本無期

新月举杯處

清流入句時

秋闌虫語苦 節早雁聲遲

老懶多閑事

寒暄相適宜

幽棲は我輩を容れ、来往するに本期なし。

新月に杯を挙ぐる處、清流を句に入むる時。

秋闌にして虫語は苦し、節早にして雁聲は遅し。

老懶に閑事多く、寒暄は相ひ適ひて宜し。

なお西阜・半仏にも同題の作があり参加が確かめられる。

c. 別時の小宴

致堂による「紅葉・茗花」の詩題で、詩佛・龜田鶴山・韓西臯・小野丹霞・松野文園の参加による小集が、致堂邸で持たれたのは九月下旬頃である。「茗花」は茶の花で、椿の花の一種。現在の十月初旬から十一月にかけて白い品のよい花をつける。この花を詩佛は「その花の上品な白さは、ひっそりと操を守る美女であり、雲に眠り石の上を歩く仙人のように汚れない。玉のような花は、仏前にあつて勤行の時に打ち鳴らす鐘である響子をさかさまに吊した形で、その花びらの下に幾重にも垂れるのは黄金色の玉をした雄葉である」と賞でる(76)。西臯の作にもいう(附80)。

茗花

西臯

此花雅澹称幽情 此の花の雅澹は幽情に称ふ。

相見且欣能解醒

相ひ見て且つ欣ぶ 能く醒を解するを。

粧比寒梅齊有韻

粧を寒梅に比すれば齊しく韻有り。

香同巖桂自争清

香を巖桂に同じくして自ら清しきを争ふ。

建溪春點檀心雪

建溪には春を點ず 檀心の雪。

蒙頂冰封磬口英

蒙頂には氷を封ず 磬口の英。

元是煙霞塵外種

元は是れ煙霞塵外の種にして。

一根不向玉階生

一根も玉階に向ひて生ひず。

「雅澹」は奥ゆかしくさつぱりとして、ここでは白い茶の花の高貴さをいい、「巖桂」は木犀の異名。「建溪・蒙頂」は、いづれも茶の名所で、茶の異名として使っているが、「蒙頂」の「頂」は原本「頂」となっている。「蒙頂」は蒙頂山で、ここで採れる茶は

格別に美味かつたと伝える。また「檀心」は薄い赤色の花茶をいう。木犀に等しい芳香を持ち、響子をさかさまにした形の雪のように白い花。これは「煙霞塵外」にある仙人の食する高貴な飲み物になる品種のもので、一本たりと俗世の最高位にある玉殿(玉階)に向かつて生えぬのだ、と。

なお小野丹霞・松野文園は、ともに北遊詩草や再北遊詩草に登場するのみで詳細を伝えぬ。しかし小野丹霞は西臯とは交遊が深かつたらしく、文政年間において度々交遊して小集を重ねた金沢の商賈の一人で(註6)、致堂とも関わりの深い人だつたらしい(註7)。

d. 鷓鴣亭・雲松庵・四并樓小集

鷓鴣も未詳であるが富田痴龍の知人だつたらうか。咲き遅れた菊が香りを放つ、そんな晩秋の短か日に「塵談は未だ玄玄を盡さず」というが、詩佛との奥深い詩談義は尽くしきれぬものではなかつた。「玄玄」とは老子の説く、玄の玄なる深遠な道理のことで、時に詩佛は五十八歳、痴龍は七十八歳である。共に耆宿と呼ばれても遜色のない年ごろである。この二人に加えて鷓鴣もまた、同様の老儒に加えられる人であつたと思える。(附16)

秋晚鷓鴣兄亭小集寄詩佛先生

富田痴龍

詩中真佛墨中仙

詩中の真佛、墨中の仙。

詩墨無奇不出天

詩墨の奇しきことは天に出でざるは無し。

人海波濤須付幻

人海の波濤は須く幻に付すべし。

詞場風月貴良緣

詞場の風月は良縁を貴ぶ。

殿秋榮在流芳菊

秋に殿たる榮は芳を流す菊に在り。

怯老如抱葉蟬 冷に怯える老は葉を抱く蟬の如し。

短笞忽忽殊易暮 短笞は忽忽として殊に暮れ易く。

塵談奈未盡玄玄 塵談は未だ玄玄を盡さざるを奈せん。

詩佛は詩人の中の詩人で、墨書家の中の聖人である。その詩墨の奇しきことは人間技を越えている。されば俗世の幻にも等しい波濤に比して、文場での風月こそは仙界への良縁となるものである。庭には晩秋の香りを流す君子然とした菊の花があり、一方で老残の身たる私は、秋冷に蟬の抜け殻のように身をかがめている。この秋の日はまたたく間に暮れるが、詞場の楽しみはまだ玄々の境に至っていないのをどうしたらよいか、と。なお「真佛」は、佛の本身である法を人格化したブツダで、「良縁」は「詩中の真佛」によって天上世界へ昇華するためのよい因縁となること。「短笞」は秋の短か日である。

雲松庵はどこかの寺院の小庵らしい。晩秋、空翠・緑陰・井土素屏・伊東半仙が詩佛を誘って遊んでいるが、西素鶴が山寺に遊ぶ詩佛に陪した作（附52・53）もこの時のものらしく思える。

興詩佛先生訪雲松庵掃途 香林坊緑陰

幾處看楓趁夕暉 幾處にか楓を見て夕暉を趁ふ。

不妨時叩野人扉 妨げず時に野人の扉を叩くを。

一枝筇子真吾友 一枝の筇子は真に吾が友たり。

興到閑行興盡帰 興到りて閑行し 興盡きて帰る。

かつて王子猷が雪の夜、独酌して「招隱詩」を詠じていて戴逵を思い、小舟に乗ってその門前まで行つたが興尽きて還つたという。今日のこの小寺への出遊もそれに似て、紅葉狩りに出掛けて

夕陽を追うて帰り、途中に雲松庵も訪うた。さあこれで出遊の興も十分尽くせたからもう帰ろう、と。

四并楼は四並楼とも書いた。鶴山の作に「東山に遊んでこの様に登る」とあるから（附30）、東山の茶屋街あたりの遊楼らしく思われ、北遊の時もここで詩宴が持たれている。上保梅園の作に「金沢の諸君」と共にとあり、緑陰にもこの時のものらしい作があるから（附21）、空翠社中によるものと類推される。なお上保梅園は名を路、字を子遵、吉左衛門と称した越中の肝煎で、藏宿を営み算用聞の職にもついていた。俳諧・和歌・書畫・詩を善くした文人で、東林門の詩人達の一人である。（附132）

邀飲詩佛先生暨金沢諸君子四並楼 上保梅園

詩佛先生を邀飲し、金沢諸君と四並楼に暨る

秋晴小飲伴詩仙 秋晴れの小飲 詩仙に伴ひ。

四並楼頭坐綺筵 四並楼頭 綺筵に坐す。

水外林楓紅始染 水外の林楓は紅に始めて染まり。

欄前屋瓦碧相連 欄前の屋の瓦は碧に相ひ連なる。

吟哦偏有江山助 吟哦には偏へに江山の助あり。

醉飽何無宿世緣 酔飽には何ぞ宿世の縁無からん。

此興他時難復得 此の興他時 復た得難し。

謾投車轄乞新篇 謾て車轄を投じて新篇を乞はん。

「綺筵」はあや絹の美しい敷物を敷いた華やかな宴で、「江山」は国土山水をいうが詩佛の別号もいう。「投車轄」は「漢書」の陳遵傳に基づく故事。酒を好んだ陳遵は、賓客が集まると家の門を閉じて客の乗ってきた車のくさびを取って井戸に投じて帰れなくしたという。

詩佛の乗ってきた車の楔を棄てて帰れなくして、この四並楼での近作を頂きたいとふざけてみせたもの。

秋晴れの四並楼の庭院では楓が紅葉し始め、楼から眺めると、眼下の黒漆の屋根は碧の波を打たせている。そして視界いっぱい映る林楓の眺めは吟哦の心をそそり、詩佛もまたそつと言葉を添えてくれる。杯を詩佛と交わすことが出来るのも、宿世の良縁があつての賜である。この良縁による興は今後いつまた得られるか分からない。ひとつ詩佛の乗ってきた車の、楔を外して詩佛をここに引き留め、新詩でも一篇お願いしてみようか、と注。

2. 秋の期間の小集

以下は八月二十日以降、秋の期間の小集である。

a. 東山での遊び

浅野川での魚梁遊びは木谷晚山主催になる。晚山は空翠社中にあつた金沢の買人らしいが詳細は未詳で、文政八年東山の龍谷(園)寺で西臯が遊んだ時、共に参加していることが分かる程度である注。魚梁ではゴリを獲つたのだらうか、一度仕掛けると堆く山のように捕れ、この獲りたての獲物を肴に川淵で酒杯を挙げた。河辺の桜の紅葉、その向こうの卯辰山や東山の紅葉、そして上空の紺碧の秋空、それ等が浅野川の清流に映えてさながら錦模様であつた。「十分の秋色は雨餘に開け。魚は魚梁に上りて忽ち堆を作す。君と来て梁頭に在りて飲し。自りて清流を引ききて酒杯を浮かぶ」とは晚山の作である。ヤナのほとりに酒席を設け、清流を宴席の方に引き入れそこに杯を

浮かべて曲水に擬えたのである。

この時詩佛は晚山宅も訪れた。石爐せきろを構えた庵の小窓からは月の昇るのが見え、庭の松を吹く風が爐の茶釜の音に響き合つて聞こえる。「茗茗一杯 聊か酒に當つ。此の中の清味を誰有りてか傳へん」と晚山は詠う(附38)。魚梁遊びの余韻にお茶を点て、詩佛を囲んでの詩談義は、松韻を耳にしながらいつ果てるともなく続いた。

小野杏山が詩佛を東山観音院に誘つたのも晩秋頃だつた。真言宗の寺院で、卯辰山の中腹の少し小高い位置にある。観世音菩薩を本佛とする小刹で、かつては三重塔もあつたというが、詩佛が登つた頃は焼失していた。額頭二聯でいう(附104)、「山行脚に信せて藤杖を曳く。十萬の人家に秋色新たなり。細路は林に昏れて鳩語鬧し。小村に雨霽れて雁の聲頻りなり」と。現在の自動車道の傍らには、観音院の横を通つてほぼ直線に続くかつての登攀路があり、これを観音町通りという。登るにつれて、十萬の人家が秋空の下に薨を並べて見晴らされた。

b. 聖潭・曾田菊潭来訪

越中の僧聖潭が詩佛を空翠宅に訪れたのも秋である。聖潭は陸舟楼で詩佛を迎え、水見で能登へ行く詩佛を見送つた人で、長光寺東林の次弟である。その時金沢の宿舎に詩佛を訪れたいと、約束していたのである。聖潭がいう(附144)、「曾て約せり、金城留滞の日。閑を偷み杖を曳きて詩筵に到らん」と。そして詩佛が菊潭を訪れたのもこの頃である。

由緒帳などによれば、菊潭は文政五年六月齊泰の素読御用を勤め、

三十九歳で新知百石を拝領し、同年八月藩主齊泰の家督相続の許可を受けるために出府した時随行して、詩聖堂にも立ち寄っている。文政五年は最初に北遊した詩佛が江戸に帰った年である。菊潭はその詩佛の後を追うように江戸に発ち、今度は詩佛が再北遊するに先だつ四ヶ月前の七年三月末に金沢に帰つてきていた(附56)。

甲申八月、詩佛先生探能越二州勝、再到敝邑。今年四月予從
桂城、帰復得相逢、喜賦。 曾田菊潭

詩翁往年北地遊 共醉菊花潭上秋
翁去我亦遊東土 玉池蓮開立清流

今年我帰三春末 無端翁到中秋月

中秋有月無片雲 蟾兔吐出桂又発

詩篇工綴咳唾珠 胸間湧出墨竹図

瀟酒風流元無敵 醉裏情態絶魁梧

興来千里尋勝概 行装只見一衣袋

今日話舊暫同林 心清如與春山對

德異霄壤交弟兄 兄弟有時猶闔牆

平生不見喜慍色 永尋江山舊時盟

相遇相逢無閑年 不知誰了宿因縁

因縁難了問佛翁 莞爾不答只指天

甲申八月、詩佛先生能越二州の勝を探り、再び敝邑(へいご)に到る。今年四月、予、桂城(きせう)從り歸りて復相ひ逢ふを得、喜びて賦す。

詩翁往年 北地に遊び、共に酔ふ、菊花潭上の秋に。

翁去り我も亦東土に遊び、玉池に蓮開く清流に立つ。

今年我帰る 三春の末、端なくも翁到る 中秋の月。

中秋には月有り片雲も無く。蟾兔を吐き出し桂も又発く。詩篇工綴は咳唾の珠。胸間に湧き出づる墨竹の図。

瀟酒の風流は元より敵無く。醉裏の情態は絶だ魁梧たり。

興来れば千里に勝概を尋ね。行装には只だ見る一衣袋。

今日舊を話して暫く同林すれば。心の清しきこと春山に對

ふ如し。

徳は霄壤を異にし交は弟兄たり。兄弟も時有りて猶ほ牆に

関く。

平生喜慍の色を見ず。永く尋ねん 江山舊時の盟を。

相ひ遇ひ相ひ逢ふて閑年なく。知らず誰か了せし宿因縁を。

因縁は了し難きを佛翁に問ふに。莞爾として答へず 只だ

天を指す。

「蟾兔」は月中に住むというひきがえると兎、また「桂」も月中に

あるという桂樹をいい、「桂発」と共に十五夜の月が出てくるの意。「情

態」は酒に酔つた時の心持ちと、君子然とした態度、「魁梧」は悠揚

として動じぬ姿。「勝概」はすぐれて美しい風景、「衣袋」は旅行用

の衣装カバン。「春山」は春の山に對するような温雅な人柄で、「霄壤」

は天と地。二人にはそれほど大きな隔たりがあることをいう。「闔牆」

は同じ牆の内うちで争うことで、兄弟喧嘩、「喜慍色」は喜んだり怒つた

りする表情。「江山」は現世の意だが詩佛の号も指し、「閑年」は暇

でのどかな年をいう。

第五聯以降は、詩佛の詩画や風貌の卓絶せることを、「魁梧」「春山」

の如くがっしりして温雅だといひ、人徳に到つては菊潭とは霄壤(雲

泥)の差があると称する。また菊潭はいう、今年五十六歳となつた

詩佛と四十二歳となった菊潭とは、さながら兄弟のように交わったが、兄詩佛はかつて一度たりとも怒った顔をみせたこともない。それはまるで前世からの盟約があったかのごとくである。そしてこの奇妙な因縁について詩佛に問うと、詩佛は「こり笑つてただ天を指し、「これは天命なんだよ」と示したという^{注10}」

C. その他空翠楼での小集など

空翠楼に詩佛を訪うたことが明らかなるが、この内小野丹霞の場合は初冬なので、秋の小集は五作となる。しかしこれは空翠楼と明記してあるものに限るので、単に「詩佛を訪う」とあった作の中にも空翠楼を訪うたものもあるであろう。

(附42) 訪詩佛先生空翠楼

(附46) 訪詩佛先生空翠楼

(附51) 奉訪詩佛先生空翠楼賦以呈

(附70) 奉訪詩佛先生空翠楼

(附105) 奉訪詩佛先生空翠楼

原逸莊

森竹涯

加藤枳園

増田南阜

小野杏山

この内、森竹涯と加藤枳園とは同じ時のものと思え、他の三人はそれぞれ別時の訪問と思える。原逸莊は詩佛を臨泉亭に迎え、小野杏山は先述のように詩佛と共に東山に登った人。他三人は初見でいずれもその伝をつまびらかにしない。小野杏山の作にいう(附105)。「時に新詩を寫して小扇に書し。更に墨竹を求めて疎箋を展ぶ。奇書名畫は牀の上に堆く。淳酒珍肴は坐邊に列ぬ」と。新詩を扇や軸に写し、墨竹を求めて箋紙を広げて乞うた。その序でに酒や肴を手土産に持参したが、見ると詩佛の傍らにはそうした贈り物が山のように

並べられていた。更に詩佛の使用する机の上には、暇に書き付けた詩作や墨竹が堆く積み重ねてあったという。恐らく訪うて依頼する文人達や好事家の請に応えるためのものであったろう。

その他、伊東橘窓が「枕上に君を懐ひて猶ほ未だ眠らず。獨り孤燈に對して詩を鍊る處」と(附47)、夜詩佛を懐つて詠じたのも秋の作である。橘窓もまた、文政から天保にかけて僅かに作を残す文人である^{注11}。

〔注〕以下「再北遊詩草」以外の作品は、作品名と作品番号を記して出典を明確にした。また本文で小集に関する作品は番号で示したが、作品の一部を本文に採った作については、その題号も記した。

注1. 盆正月については、石川県立歴史博物館「紀要」二十一号に大門哲氏の「寄せ物、造り物、模型―十九世紀金沢における造り物装飾の変容―」があり、近世史料館には、盆正月の「造り物展」
「諸物手引草」「盆正月造物案内」等の資料がある。

注2. 「詩聖堂」(八18)「九月六日入金城、此日家家掛燈、士女雜還、歡聲四動、俗謂之盆正月、盆者中元也、正月上元也、蓋今公襲封入部之初、以錢帛賑國中民、民祝之、比上元中元云」

注3. 「菊潭遺稿」に「奉次旭堂佐々木大夫瑤韻」があり、旭堂の母の六十歳を寿ぐ作もある。

注4. 以上の引用は(73「空翠楼作」・75「甲州大夫秋錦閣」・附54「寄詩佛先生」)による。

注5. 致堂聯句は(65)・「致堂詩稿」(二48「観海棠有感」)、東軒小

集は(66「奉送詩佛先生掃江戸」・附84・102・158)、潺湲亭は(附84・102・158)による。

注6. 小野丹霞については、「四宜園詩稿」(以下「四宜園」と略称)

の文政七年から十年にかけて、十二回にわたって丹霞が西臯を訪れたり西臯が丹霞亭の小集に出掛ける作がある。しかし十年五月の贈答詩以降、交流を示す作がないからこれ以降間もなく没したのかもしれない。

注7. 以上(76「茗花」・附13・14・27・79・80・88・89)による。

注8. 以上鶴鶴亭は(附16)、雲松庵は(附24・52・53・58「奉

陪詩佛先生遊雲松庵」・96・97・98「與詩佛先生遊某公別業」)、四併楼は(附21・30「同登四併楼用先生四年前韻賦即景」・132・164)による。

注9. 「四宜園」二155に「夏日遊龍谷精舎」とあり、その注に「息齋・東亭・圓平・暁山」と参加者を記している。

注10. 以上魚梁は(附37「陪詩佛先生遊淺川魚梁」・38「奉迎詩佛先生弊廬」、東山は(附103・104「奉陪詩佛先生登東山」、聖潭は(附144「奉訪詩佛先生」、菊潭は(附56)による。

注11. 以上空翠楼は(73・74・附42・46・51・70・105)、橘窓は(附47「秋夜懷詩佛先生」)による。